

令和4年度▶令和5年度

# 学芸員研究紀要

2022~2023

# 山岳写真家・白旗史朗の 「山岳写真」について

酒田市美術館 学芸主任 武内 治子

## 1. はじめに

山岳写真家・白旗史朗（1933 - 2019）は、父が酒田市（旧・八幡町）出身であったことから、鳥海山を「父の山」と呼び、幾度となく足しげく通い、多くの写真を撮った酒田市にゆかりのある写真家である。白旗は、亡くなる1週間前に本市に対し、文化・芸術の振興の為に、鳥海山を撮影した写真データ100点の活用を承諾した。本市では、八幡総合支所が中心となり、写真データをパネル化する作業を進め、当館の市民ギャラリーで年1回程度展示するほか、八幡総合支所内での常設展示をし、広く市民に対して白旗の鳥海山の作品群を通して地域の魅力を発信し続けてきた。白旗が惜しくもこの世を去った後、本市と当館は、一般社団法人白旗史朗保存会のご協力のもと、何度も打ち合わせを重ねながら、白旗の功績を再度見つめ直す契機として、特別展の準備を進めた。そして、2023年4月29日(土)から6月25日(日)にかけて特別展『山岳写真家 白旗史朗展 心に山ありて幸いなり』を開催する運びとなった。

本論では、特別展の振り返りを行いながらその課題と成果を述べていく。また、白旗の山岳写真家としての長いキャリアの中でも、初期の仕事について注目し、「山岳写真家・白旗史朗」が形成されるまでの過程を追い、白旗の「山岳写真」について考察していきたい。

## 2. 特別展『山岳写真家 白旗史朗展』を振り返って

2023年に当館で開催した『山岳写真家 白旗史朗展 心に山ありて幸いなり』は、白旗芸術の全貌に迫る没後初の大規模な回顧展となった。本展では、白旗の生涯をかけた膨大な山岳写真の中から、厳選して113点を選定した。

本展は7章で構成し、内容は次のとおりである。

①白旗が山岳写真家として独立する以前の仕事を「写真との出会い・独立まで」、②仕事での分岐点とも言える「マカルー遠征」、③ヨーロッパ・アルプス、カラコラム、ヒマラヤ、カナディアンロッキーズなど取材用のカメラを担ぎ、自らの足で山肌を踏みしめ、時には滑落にあいながら、まさに命がけで撮影した「世界の名峰に挑む」、④白旗のライフワークである「心の山・南アルプスとふるさとの山・富士山」、⑤南アルプスと並行して撮影し、光と影の対比など自身の表現方法を獲得した「尾瀬」、⑥白旗が選んだ日本の「百一名山」を紹介する「日本の名峰を撮る一父の山・鳥海山を中心に」、⑦高山植物や山に生きる動物を撮影した「山のなかま」である。

酒田市にとって、白旗史朗は「鳥海山」を撮った写真家として馴染みのある作家である。本展のねらいは、白旗史朗が挑んだ世界の名峰、日本の名峰、更に高山植物の保全活動にも尽力していたこと等、これまで本市で紹介しきれていなかった白旗の全仕事を網羅することである。しかしながら、白旗の仕事は膨大で、会場のスペースの関係上、パタゴニア、ニュージーランド、韓国の名峰の作品群の展示は叶わなかった。この点は、またの機会の課題としておきたい。

本展では、白旗の過去の展覧会でも紹介されていなかった部分である山岳写真家以前の仕事と、マカルー遠征について注目し取り上げたが、その理由を述べていく。

1950年代の故郷の山梨県を撮影した作品や妹の肖像写真、そしてバレエダンサーのアレクサンドラ・ダニロワやフレデリック・フランクリンなどの肖像写真や舞台写真は白旗の山岳写真家になる前段階の作品8点であり、これらを初公開作品として展示できたことは展覧会の意義としては大きい。作家自身は収入の糧として請け負っていたバレエの舞台写真や経済雑誌の仕事との種別を誓い、1962年にそれらフィルムを裁断し「山だけを撮る写真家」として独立宣言をしている為、その頃の仕事をあまり評価していないよう



fig.1) 《マーゴ・フォンテイン》  
1959年2月

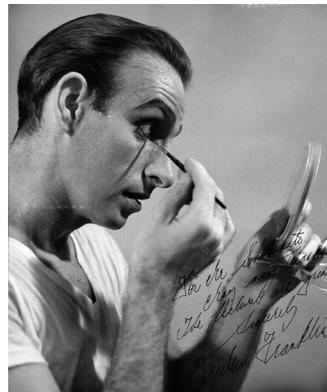


fig.2) 《フレデリック・フランクリン》  
1957年9月

である。しかし、裁断を逃れた写真群を検証してみると、本展で展示したフレデリック・フランクリン (fig.1)、マーゴ・フォンテイン (fig.2)らの肖像写真には彼ら直筆のサインが確認できた。これは、白旗の写真が一流のバレエダンサーらから高い評価を受けていたことを意味する。世界を舞台に公演するバレエダンサーたちは、写真を撮られ慣れているはずで、そのダンサーたちが白旗の写真に自らサインをしており、特にマーゴ・フォンテインにいたっては、公演中の舞台写真2枚にもサインをしているくらいお気に入りだったようだ。

白旗史朗保存会の小谷哲朗氏によると、白旗は公演の演目の内容を予め調べ、ダンサーたちのポーズや舞台の見せ場を頭の中に叩き込んで撮影に挑み、絶好のシャッターチャンスを狙っていたという。本展では展示しなかったが、現在残されている舞台写真を見ても、

動きの速いダンサーたちの次の動きを瞬時に予測し、シャッターを切っており、ブレがないピントの合った写真が多く残されている。生活の糧のための仕事として請け負っていた撮影だが、一切の手を抜かず、一流のダンサーたちを目の前にして、自身も一流の仕事をする真摯な姿勢が伺える。白旗のこういった仕事への向き合い方がバレエダンサーらから評価される結果となったのであろう。

また、当時を回想した白旗の証言によると、「当時の私は自分の作風確立のため、山岳写真だけでなく、一切の写真書、写真展を見ることを避けていた。他からの影響を恐れたのである。」という記述がある。白旗は山岳写真家として独立後は人物の写真を発表していない。その点において、白旗が撮った肖像写真は希少であり、且つ初期の段階から誰の真似もせず、自身の技術と表現のみでこれだけの仕事を成し遂げていたことを改めて評価すべきであろう。

また、本展では「マカルー遠征」も30代の若い時期の仕事として、後のキャリアへ続く大きな経験だったことから、あえて章を立てて取り上げた。

1970年5月、白旗は日本山岳会東海支部「マカルー遠征隊」の一員としてマカルーに挑んだ。当時、マカルー東南稜は未だ誰も足を踏み入れていない新ルートであった。白旗は登頂までのあらゆる状況、事物、現象を撮影することを望み、また自身も登頂しこの快挙を写真に収めたいと切に願っていた。

しかし、実際には、先に第6キャンプに入ったアタック隊員の食料と酸素が不足したと無線が入ったため、後に続く白旗らの食料、酸素の分を全て荷揚げし、隊員に譲ったことから、7,600mに設営された第5キャンプまでしか入ることができなかった。白旗が第4キャンプに下山した5月23日午後7時10分、アタック隊員が登頂に成功したとの連絡が入る。白旗は、「このよるこび、この感

凡例

\*本論は武内治子「白旗史朗の「山岳写真」について」「山岳写真家 白旗史朗展 心に山ありて幸いななり」2023年、一般社団法人 白旗史朗保存会、p.11-14に加筆・修正を加えたものである。



fig.3) 《C.4俯瞰 (7200m)》  
1970年5月

日本人のアタック隊員たちが未踏の新ルートを拓き、登頂を達成するというチームの目標の為に、緑の下の力持ちに徹した体験は白旗を大きく成長させる契機となった。

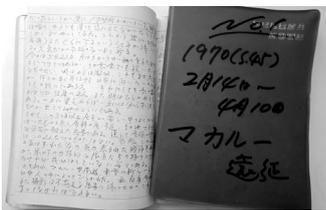


fig.4) マカールー取材ノート2冊  
(赤い手帳)



fig.5) 登頂時のスケッチ  
(C.5より)

材をするなど、多くの世界の名峰に挑み続けた。

南アルプスや富士山、尾瀬など日本の撮影で培った霧や雲を構図に取り入れる手法に加え、世界の名峰の取材では、日本では体験できない山の大きさ、岩、氷の質感など、山の本質を追求する姿勢に益々磨きがかかった。

以上、展示構成部分においては、白旗の山岳写真がどのような環境で形成されていったのかを初期の仕事で紹介した。

本展では、その他に作品解説の一部を一般社団法人鳥海山・飛鳥ジオパーク推進協議会の 大野希一氏 (事務局次長兼主任研究員) に依頼した。大野氏には白旗の写真から見た地質や環境の話などを取り入れた作品解説を担っていただき、登山の経験がない来館者にも世界や日本の名峰に興味を持って頂けるように工夫をした。当館では他分野との地域連携を図ることも地域の文化を盛り上げる大切な取り組みと位置付けており、本事業はその好例の一つとなった。

激、私は不満足な結果に終わった私自身のことはいつしか忘れ、勝利の快感にどっぷりと浸かっていたのだ。』と後に回想している (fig.3)。自分も登頂したい、それが出来なければ登頂を終えて帰ってくる隊員たちの姿を撮りたいというカメラマンとしての欲を捨てて、

白旗がマカールー遠征に特に力を入れていたことは遠征時に付けていた赤い手帳の取材ノート2冊から分かる (fig.4)。白旗は、山へ登る際事前の撮影計画を立てずに、臨機応変にその時の天候や状況に合った撮影方法を考えることを常としていた。しかし、マカールー遠征時、未踏のルートを拓くという前代未聞の挑戦にあたって、どのルートでどこまで登ったのか、隊員たちの状況など時にはスケッチを描くほど詳細に手帳に記した (fig.5)。白旗はその後も世界の名峰に挑んでいるが、これほどまでに詳細に取材した手帳は残されていない。

日本人がマカールー東南稜を拓く歴史的快挙に隊員の一員として参加したことが白旗にとってその後のキャリアを大きく切り開くこととなった。その後、1976年コミュニティニズム峰 (7,495m) に初登頂、1978年には96日間にわたるヨーロッパ・アルプス全域取

### 3. 「山岳写真」とは何か 「山岳写真家」とは何か

白旗は、自身の著書の中で、「山岳写真」と「山岳写真家」についてしばしば言及している。一般に言って山岳写真は「山または山に関連した事象の写真」、山岳写真家は「山の写真を撮ることを生業とする人」と捉えられているが、その本質についてもう少し掘り下げていきたい。

白旗は、「山岳写真」とは単なる記録写真ではなく、撮影者の心が反映された主観の表現がなされている写真のことだと定義づけている。つまり、撮影者の個性と生命、自然観が写真から読み取れるということである。特に自然観については個人の生まれ育った環境が大きく影響していることを下記のように指摘している。

山岳写真には、すでに何回か述べたように作者 (撮影者) の心の反映が見られなければならないが、それには作者の持っている自然観と感受性が大きく影響してくる。人間は生まれ育った環境によって、それぞれ異なった自然観を持っている。生まれながらに持っている感性と違って、自然観は大部分が後天的に形成されるが、この山に対する考え方、山への理解ともいうべきことがら、生来持つ感性とともに、山から受ける感動の原点をしっかりと把握し、分析して、どのように表現すればよいか、その方向は、方法は、の判断の基準となるのである。

(引用：白旗史朗『白旗史朗の山岳写真 撮影テクニック』山と溪谷社、1999年、p.18)

生まれながらに持っている感性と後天的に形成されていく自然観が備わってこそ初めて、山への理解度が深まり、人の心に感動・共感を与える「山岳写真」が撮れるのである。言い換えれば、山岳写真には、撮影者がどう生きてきて、何を考え、どう感じているのかが反映される。そして、それを表現する最善の手法や技術を持ち合わせている者が「山岳写真家」なのである。また、白旗は、山、写真、私は1つのものに凝縮しており、山と写真のどちらかが欠けても私自身ではないとも語っている。それぞれの個体が1つのものと感じる感覚とは一体どんなものであろうか。それは、自らの人生をかけて1つのことを追求しなければ到達できない領域であり、体現した者にしか理解しえないものであろう。しかし、私たち鑑賞者は白旗の山岳写真を通して、白旗の山に対する深い愛情や情景を感じ取ることが可能である。それはやはり、白旗が山とどう向き合い、山をどう見つめ、捉えているのかを、第三者に伝えられる確かな表現力と技術力を十分に持ち合わせた山岳写真家だからなのである。

ここで、白旗の「山岳写真家」としての条件を確認していこう。

私は「山に登らなければ山岳写真は撮り得ない。だから山岳写真家を志す人間は山に登るべきである」と考えています。

(引用：白旗史朗『山と写真 わが青春』岩波ジュニア新書、1940年、p.18)

上記の文章は簡潔であるが、山岳写真家の信念として非常に重要である。山岳写真家は登山家の荷物に加えてカメラ機材を背負い、不安定な山の気象状態を見極め、四季折々の豊かな山の姿を写真に収めなければならない。また、白旗は山岳写真家の最低条件として、厳冬の3000m峰に自力で登れることと、岩壁を登れる高度な技術があることが必要だと述べている。更に完璧を目指すならば、登山技術の他に、山の地質、地形、植物、動物、気象、歴史なども十分に学ばなければならない。その理解度によって自分の撮影したいポイントや、撮影したいイメージを具現化できるとしている。実際、白旗は撮影の際、航空機などは使わず一歩一歩、自分の足で山を踏みしめて撮影に挑む。自分をどれだけ追い込めるか、自分の限界を

どこまで推し進め、可能性を広げられるのか、その厳しい撮影スタイルの積み重ねが、あの神秘的で尊厳な山の写真に結実するのである。白旗の山岳写真は、長い年月をかけて培ってきた写真技術と登山の技術、撮影ポイントに辿り着くまでの厳しい行程、そして何より山への深い愛情があってこそ成り立つのである。

#### 4. 青年時代一師・岡田紅陽との出会い

前章で述べてきたように、白旗は山岳写真に必要なものは育ってきた環境で培う自然観と生まれながらの感受性であるとしている。本章では、白旗がどのような環境下で育ち、山岳写真家として独立していったのかを述べていく。

白旗史朗は1933年、山梨県北都留郡広里村（現・山梨県大月市）に生まれる。この土地は、山中湖から流れる桂川、その支流の笹子川が流れ、これとほぼ直角に真木川、浅利川などが流入し、複雑な起伏を形成している。南方に徳山、北方に岩殿山、兜山、雁ヶ腹摺山、大菩薩南嶺の山々、東には百蔵山、扇山、西には高川山と九鬼山、そして桂川の谷の上に富士山がそびえ立つという、山に囲まれた土地で育っている。

父に連れられ、兄と山歩きをして幼少期を過ごし、そこで突然の夕立に遭ったり、アケビやヤマブドウといった山の幸との出会いなど、山に登る度に新しい発見と楽しい思い出を作っていた。中学卒業後は、家庭の事情により高校には進学せず、弟や妹たちの世話をしながら家事手伝いをする時期が約3年続いた。その間に、白旗を山岳写真家に導く決定的な出来事が訪れる。地元の写真館で桂川に掛かる高月橋とそびえ立つ周辺の赤松を捉えた写真を偶然目にする。その瞬間、幼少期から育まれてきた自然への憧れを、自分でも写真で具現化してみたいという欲求が白旗の中で生まれたのである。白旗は父へ自然を撮る写真家になりたいと打ち明け、協力を求めた。父は息子の願いを聞き入れ、それならば有名な写真家のもとで修業をするのが良いと、富士山の写真で名高い岡田紅陽（1895-1972）に面識もない状況で願い出るのである。こうして白旗は岡田の内弟子として約5年間下積み修業をする。

岡田は白旗へ何かを教えるということはず、ただ自分の仕事への姿勢を見せることで山岳写真家とは何かを教えていった。白旗は当初撮影させてもらえないことに心の中で不満を持っていたが、富士山の撮影に同行しているうちに、自然を相手に撮影することはどうということなのか、師が何を撮ろうとしているのかを見極めることこそが勉強なのだ気が付く。そして、師が富士山に對峙し気迫の迫った真剣勝負の現場をそばで観察しているうちに、師が撮影に当たって求めているフィルムやレンズなどを瞬時に判断し渡せるようになっていった。それは、師が富士山に對して富士山の心や表情を感じ取ろうとしている時、白旗もまた同じように感じようと努め、師と富士山と自分の心が一致した瞬間でもあった。全身全霊、富士山に打ち込む師の姿は、山岳写真家として独立した後の白旗の撮影スタイルと重ね合わせられる。師との出会いによって、白旗の自然観は形作られていった。

白旗は、南アルプス、尾瀬などをライフワークとしているが、それに加え師が撮り続けた富士山もテーマとしている。師のライフワークとしていた山を、弟子がライフワークとすることは覚悟がいる。それは師とは違う撮り方で富士山に挑戦するという大きな課題であり、これを成し遂げてこそ師への恩返しとなると白旗は考えた。白旗は、その課題の解決方法として、2つのことを実践している。

1つ目は富士山の山中に深く入ることをあえて回避し、師がしてこなかった撮影方法、つまり南アルプスから望む富士山の撮影である。富士山は他の山と違って形が複雑ではなく、単純明快な山容の富士は山に入り込むとかわって円錐の美しさが失われ、魅力が半減してしまうと考えたのである。そして、富士山と南アルプスの高さが對峙する時、そこに高度感が強調され、緊迫感が醸し出される効果があると考えた。《盛夏爽涼（南アルプス北岳）》（fig.6）や《雲海漠々（悪沢岳）》（fig.7）はその好例と言える。

2つ目は雲や霧を効果的に取り入れた表現方法である。これは、



fig.6) 《盛夏爽涼（南アルプス北岳）》



fig.7) 《雲海漠々（悪沢岳）》  
1968年10月16日

白旗の他の名峰でも確認できることだが、他の写真家が快晴を狙いがちになるところをあえて雲や霧の姿を取り入れることによって、山の雄大さや大きさを表現でき、幻想的な光景を演出している。これは白旗独特の表現方法で、雲や霧を取り入れた写真は富士山や尾瀬の写真に特に多い。しかし、理想的な雲や霧を捉えるには変わり易い天候の中で容易なことではない。理想的な雲や霧が現れるまで忍耐力と集中力が必要であるが、そういった姿勢は師である岡田の撮影スタイルと似ている。

#### 5. 終わりに

本論では、2023年に開催した展覧会の振り返りをしながら、白旗史朗の初期の仕事に重点を当てて、白旗の山岳写真家としての姿勢と、白旗にとっての山岳写真の定義について述べた。山岳写真家として写真を撮るには、長い月日をかけて山と対話し続けること、そして自分がイメージする心の山を具現化するためには、写真家としての確かな技術力、表現方法の確立が必要不可欠である。そういった要素を、白旗は日本や世界の名峰に登り、写真を撮り続けることで習得していったのである。白旗の飽くなき山への探求心は、即ち内なる自分自身への探求心である。白旗は、10代の頃から生涯をかけて山を愛し、山岳写真を撮り続けることと決意し、それをやり遂げた。白旗の残した山岳写真には、山への深い愛情が写し出されている。

筆者自身、作家本人にお会いしたのは2018年に八幡タウンセンター（酒田市）で開催された「やわた文化祭50回記念事業」での講演会「父の山 鳥海山を語る」での1度きりである。講演会終了後、楽屋でお会いした際、講演会での疲れも見せず、力強く温かい眼差しで迎え入れてくださったことが懐かしく、本市へ向けてくださった支援と愛情に少しでも恩返しできればと思います。展覧会を立ち上げた。結果として、山岳写真家白旗史朗の仕事の全容を紹介できたことで、全国の山を愛する方々、写真愛好家の方々など、沢山の方からご高覧頂けた展覧会となった。

最後に、展覧会の開催にあたり、一般社団法人白旗史朗保存会の皆様には作品整理や、資料提供、会期中の関連イベントの調整等多大なるご協力とご助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

- i 図録『山岳写真家 白旗史朗展 心に山ありて幸いなり』2023年、一般社団法人白旗史朗保存会、p.36
- ii 前掲書、p.132
- iii 白旗史朗『白旗史朗の山岳写真 撮影テクニク』山と溪谷社、1999年、p.14
- iv 白旗史朗『山と写真 わが青春』岩波ジュニア新書、1940年、p.2
- v 前掲書、p.19

#### 【参考文献】

白旗史朗『山、わが生きる力』新日本出版社、2003年  
『昭和写真・全仕事SERIES・11 白旗史朗』朝日新聞社、1983年  
図録『白旗史朗 日本と世界の名峰を讀う』山梨県立美術館、テレビ山梨、白旗史朗写真展実行委員会、2003年  
写真集『白旗史朗の山』山と溪谷社、1986年